



TITLE:

<雑録>二つの山西學術記

AUTHOR(S):

日比野

CITATION:

日比野. <雑録>二つの山西學術記. 東洋史研究 1943, 8(2): 114-114

ISSUE DATE:

1943-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145791>

RIGHT:

以後、比較的挿漢の行動より微溫的である事の反證と思はれる。此に明人の北方民族諸部に對する憎惡と親善の念の區別的表現を認め得ると考へるのである。

(昭和一七・一二・一五)

二つの山西學術記

昨年の第一次山西學術調査研究團に關する二つの報告書が最近相次いで世に送られた。一は各班長の手記を朝日新聞社でまとめた「山西學術探検記」、他はこれに同行した朝日の特派員宮本敏行氏の「山西學術紀行」である。前者はこの四月の發行。

後者は昨年の暮に發行された筈なのだが、どうしてか我々が手にしたのはこの數日前であつた。

支那内地に對してかうした學術的な綜合調査團が派遣されたのが最初のことであり、また山西といふ地域が諸種の點から非常に重要なところであるばかりでなく、自分にとつては五臺山も晋南地區も曾遊の地であつたので、殊に興味深く讀まれたのである。元來この調査團は資源科學研究所で企劃されたもので、調査項目も地理・地質・動物・植物・人類等自然科學が主であるが、それだけに我々素人には新しい知識を得るこ

とが多く、有益であつた。我々も平生支那を旅行するときに、かうした専門家たうと行動を共にすることが出来たらとほんとうに羨望に耐へなかつた。

その代りもしかうした綜合調査團に加はつて行つたなら、いろ／＼の事情から思ふがまゝ、調査も出来ず、さぞ不自山なこともあるだらうとも思つた。綜合調査といふことが實際どの點まで可能であるか。勿論交通や警備の上からは團體行動をとることが便利ではあらうが、果してかの大仕掛けな組織を作る必要があるのであるか。始めてのことだけに今後にも多くの教訓を残したことに思ふ。肝腎の團長が實際の調査に全く參加してゐないなどといふことは問題にしないとしても。

いづれにしても、如き大規模な支那調査は調制的な事業である。また團員の大部分が支那といふ土地を

このとき始めて知られた方であつたといふことも、それだけで我が學界に一つの進歩をもたらしたことになる。探検記の各章を讀んでも、支那の他の地方と比較された山西の特異性といふものが充分に描き出されてゐないものやむを得ないところであらう。

宮本氏の紀行にさうした學術的な香りが乏しいのは當然ではあるが、しかし前者にない美しい圖版が讀者の眼を樂しませてくれる。悪いことは土地の歴史や沿革となると殆んど間違つてゐる。殊に噴飯にたへないのは醇縣にわざ／＼「じゆん」といふルビがふつてゐる、おまけに寧を寧にかへて字引にない文字がこしらへてある。現地の兵隊さん達の百姓よみんだが注意してほしい。蔚縣を「いけん」などと讀む連中は現在では殆んどなくなつた筈なのだから。

(日比野)